

きびたひ半こうびたひ月びたひたうけんびたひ角びたひとあり是は寶永頃の作にてのちに引し種々のさうしよりは近きものなれど百年前よりいひきたりし髪の風はおほかたこに盡したりゆゑにまづさきに出したり遙額は冠の名なれどそれを額の名にかりもちひし

海老折 形をもつて名づけたるなるべし今海老尻といひて難波にてもつはらおこなはる

は是か○中仁世物語におかし男つりがみいぼう組蘆や釜ふたのとつては針もなみつけつおくれつきできにけり此男、なまも

りける昔の歌に蘆や釜ふたのとつての助など知る人にてあ
のなりければそれをたよりにゑびの助どもかゝみあつまりきにけり此男のかみもゑびの助
なりとあり、髪も海老の助とはかの海老折の事をいふかたしかにきこえねどまづ抄録してお
きつ此そしは寛永中の作なりといふかんなにて書たれば上といふ事かもあるべからず

蟬折 是も海老折の類にて形よりいでたる名なるべし

たてかけ 男色十寸鏡 貞享四若衆の髪の事をいふ條髪を油にてすきいれぬればおのれと底

艶あるものなり云々たてかけの大たぶき髪つとの大キなるは似合たると似あはぬ人あり
〔我衣〕男女ノ髪時々變ル事

上古ハ髪付油或ハコキ元結ト云コトナシ老若共ニ胡麻油ニテ梳テコヨリ元結ニテ結タリ月代ハ織田信長ノ時ヨリ多クソリタリ前ハ不殘有髪ナリ○中略



寛永ノ
比如斯